



經濟俱樂部講

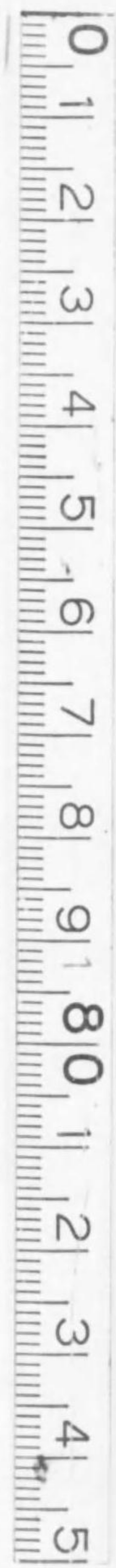
特234

646

思想問題判斷の鍵

皆川治廣

| | |
|----------|---|
| 緒 | 言 |
| 自由平等の國 | 體 |
| 親愛の團 | 體 |
| 其の得失 | 能 |
| 生物の二大本能 | 一 |
| 本能歸 | 一 |
| 本能と心身の活動 | 動 |
| 正邪善惡の標準 | 準 |
| 孔子 | 子 |
| 荀子 | 子 |
| スペンサー | ー |
| ベーンザム | ム |
| マールク | ス |
| 附 | 言 |



始



特234
646



思想問題判断の鍵

皆川治廣



思想問題判断の鍵 目次

| | |
|----------|----|
| 緒言 | 一 |
| 自由平等の國 | 九 |
| 親愛の團體 | 一六 |
| 其の得失 | 二四 |
| 生物の二大本能 | 三六 |
| 本能歸一 | 三三 |
| 本能と心身の活動 | 三六 |
| 正邪善惡の標準 | 四三 |
| 孔子 | 四九 |
| 荀子 | 五五 |

| | | |
|-------|-------|---|
| スベンサー | | 英 |
| ペンザム | | 英 |
| マルクス | | 充 |
| 附言 | | 充 |

思想問題判断の鍵

司法次官 皆川 治 廣

緒言

大變遅くなつて相済みませぬ。申譯を省きまして、少々急ぎますから、直ぐとお話を申上げます。且つ出来るだけ早口に、口が廻れば、早口に申して行きたいと思ひます。申上げる事柄は或は御期待に添はないかも知れませぬが、此度發表された共産黨事件と云ふやうな事ではなく、そのうした具體的な現實の事實からはずつと離れた所で、思想問題判断の鍵と題しますが、思想問題に就き根本に這入つた所での考へ方の一端を申上げて見たらばと思ふのであります。

實は此頃毎日、思想問題に就て訴追せらるゝ人の増加し行く事に驚かされて居るのであります。此の思想問題に就て檢舉せらるゝ人々は、必ず司法大臣の決裁を経ます、従つて自然私の決

裁を経る譯になりますが、其數が日々増加する。本人達の爲めにも痛みます。國の爲めにも憂ひます。どうも此儘に放つて置いてはならないと云ふ感を深くされるのであります。何としたら宜いのであらうかと思ふのであります。皆様の中にも被害の方がお有りになるかも知れませぬが、名士の子弟や資産家の娘達が段々其の中にはあるのであります。どうも善良な家庭でも治りなさまは付かないらしい、學校でも治りは付かないらしい、又各方面の取締りに任ずる役人も、なか／＼にもて扱ひものであるらしい。そうしたものぢやない、そんな事ぢやいけなないと私は思ふのです。そこでお話をしてみたいと思ふのですが、皆さんは、どう云ふ風にお考へになつて居るのでせうか、打捨てゝ置いてはいけません、是非何とかお考へにならなければなりません。

彼等は一體どう云ふ風なことを言うて居るのか、又之を取扱ふ人々はどう云ふ風に困るのだから其の一端を申しますと、例へば斯うなんです。三・一五、四・一六の檢舉當時の事でありましたが、或る検事が多數の被告人中に自分の先輩たる某氏の令嬢が介在して居るのを見て、其の令嬢は女子としては最高の教育を受けた人でありますが、其人が居るのに接して、先輩に對する同情なり氣の毒さから、諄々として其婦人に其の誤まれることを諭した。するとそれを聞き去り聞き來り

たる其婦人は、最後に至つて泰然として言ふには、御話の筋は良く分りました、併しながら忠孝が何故にそんなに尊いのですか、其理據をお示し下さい、それが得心が行つたならば、今日只今からでも私は忠孝の爲めに生死いたします。併しながら其理據をお示し下さらなければ百千萬語も無用であります云々。此難詰()を受くるに至つて検事は語が塞つて云ふ所の事を知らなかつたとのことでありませう。さう云ふやうな類例は常にある事でありませう。家庭に於ける父兄は彼等から言ふと無智盲目なものであつて、共に談ずるに足らないものなのであります。お父さんやお母さんは今に行詰つてから覺るであらうと云ふ風な態度で、親の忠告などはまるきり相手にしやうとしない。どうしたら良いのでせうかと親達は困りぬくのであります。それは家庭ばかりでなく學校の先生に聞かしても同じ様な事なんです。方々の學校に思想善導の爲めの主事がありますが、悪口を言つては濟みませんから具體的な事實は申しませんが、主事諸君の心事なり努力なりを聞いて見ましても、皆が皆でもありますまいけれども若い者の方から言はせると好笑の談柄たるに過ぎないのであります。併しそれは學校ばかりではありません、或る取締上の責任のある官吏と言つて置きませう、思想問題の専門家として立つて居る或る取締上の責任ある官吏が私

に申した言葉にも、元來赤色青年等は、マルクスだのレーニンだのと言ふやうな世界的思想家を背景に有つて居る、さうして堂々たる論陣を張るのに對して、私等の方には背後に何もものをも有つては居ない貧弱な有様である。それが教育家でも司法官でも、警察官、憲兵、何でも彼でも一切合切さういふものに對抗して立つ人々の共通の悩みであると云ふのであつた。それが事實であるとするれば家庭の悩むのも當然なのですが、一體そんな有様で宜いのでせうか、それでは共産黨が日々増加して行くのも當然です。實は私はそんな事ぢやいけない、そんなものぢやないと思ふのであります。人々は餘りに考へが無さ過ぎる様にも思ふ。だから自分の考へ方が宜しいか宜しくないか、皆さんと話合つてみて、先づ以てそれを判断して頂いたらと云ふ氣がするのであります。

實は私と致しましては自分の考へ方が何方にも是認されるものならば、私は聊か教化の方面にも進出を試みたいと云ふ内心を有つて居る譯なのです。其の教化方面と申しますのは、彼等を刑務所に容れて、勞役を課し教誨を施して、其爲め多少たりとも矯正され、聊かたりとも方向轉換したとしましても、出て來ると、直ぐ舊同志が又引戻して、同志にしてしまふ、それを處れて或

る刑務所では、こつそりと人に知らせず解放したのであつたそうですが、それを又どう捜してかたうとう見付け出して、わざ／＼刑務所の前に連れて來て、凱旋式を擧げて、堂々と引揚げたのがあると言ふ事ですが、こんな安排にして又もや同志に仕上げてしまふと云ふ事になる。是ではいくら刑罰を課しても果しがない、どうしても彼等の思想の根底を征服する手段がなければならぬのであります。故に其手段の手はじめとして私は彼等を收容し、教化し、感化して根本的に更生せしむる爲めの合宿所修道院見たいなものを作り度い、さうして今申す様な刑務所から釋放せらるゝものを、再び舊同志の手に落ちる様な事をさせないで、刑務所から其修道院へ引取る事にした、同時に教養を加へて前途に志をも立てさせ度い、又刑務所から出るもののみ限りません、檢事が特定の被疑者を此人間は訴追するに及ばない、刑務所に入れるに及ばない、誰か責任ある引取り手があれば起訴猶豫にしても良いと判断する程度のものであればそれをも引取る、尙そのみならず、未だ警察の手を煩はすに至らずとも、思想關係で學校から退學處分を受けたり、教職員其他で、此問題の爲めに免職處分されたりしたのであればそれをも引取る、そうした人間を總て引取つて、根底よりの教化改善に努力する事に致したいと思ふのであります。作るの

はたつた一つでも、それが何がしかの成功を収むれば、全国に相次いで同じ様なものが出来るやうになりませう。さうすれば本望です。聊か教化事業に進出を試み度いと申すのはこれでありませう。如何なる設備如何なる手段方法を以て之を遂げんとするかは、今日のお話からは省いて置きますが、それよりも先づ根本の問題として、彼等は果して改善する事が可能なるものなりや否やの問題が私にはぶつかつて来るのであります。

多くの人の考へ方では彼等は到底改善不能の者であるらしい。或る教育行政に相當重責を持つた人の書いた冊子にも、思想問題の防衛は、豫防教育に依るより外はない、豫防教育は相當効を奏するが一度冒された者になると、治療教育は効が無い、絶對不能に近いと云ふ見方をしたのがありましたが、さうした考へを持つた人々が少なくないと思はれます。而してさうした人々から見れば、彼等を教化せんとする事などは無益なる空想たるに歸する。さうして其の必然の結果は彼等は悉く死刑に處するか、但しは又無期の遠島に處するか、嚴罰を以てするの外なき事になるのであります。併しながら彼等も人の子教化し得べしとするのが私の確信であります。改善果して可能なりや、それとも多數の人の見る如く全然不可能なるものなりや、今日お話し申上ぐる談

話の中で、それをも御鑑別を願ひ度いと思ふのであります。

尙一言を付け加へます。如何に彼等の改善が困難であつても是非とも之に對しては、能ふべき限りの努力が向けられなければなりません。實は此度の檢舉に於ても、彼等の團體を根底的に打破した積りで居ります。根本的に根こそぎにした積りで居ります。檢舉に従事した總ての人々はさう信じて居ります。私共は其成功と努力の大なるを感謝する。併しながら安心は出来ませぬ。今までの例に依つて見ましても、三・一五及び四・一六事件共、そこまで行つた積りであつたのですが、さう思つて居る間に、直ぐと露西亞から又人が戻つて来る。彼等の仲間の所謂共產黨大學の留學生が戻つて来るのです。さうすると結構又仲間を拵へる。忽ちにして數千人です。だからどうしても思想的に之を克服する道が立てられなければならないのです。而してそれに就て各家庭が覺めて居なくちやならないのです。各官憲、各教育家、國民全體が各々の立場に於て之を克服し得べき、はつきりとした確信を有つて居つて、協力一致して之に對抗しなければならぬのです。そうしませんが、豫防も充分には出来ませぬし、改善は尙更らだめと申す事になります。彼等の方に言はせますると一萬か二萬の黨員を作れば、司法機關も警察機關もチェックしてし

まふことが出来る。今に見ろ、お前達は半身不隨になつてしまふと豪語する。蓋し數に於て取扱ひが不能となり、此等の機關が破産する事を意味するのです。そして今日は、それを實現せん爲め愈々黨員の獲得運動をやつて居るので、凡ゆる方面、凡ゆる機關に潜行的に人を入れますし、凡ゆる手段をも辭しませぬ。最近では又日本の外交が、外戦に到達する事を想定して、其機會に革命を達成する軍資金の爲め、デスベレートを引いての奮闘で、御承知のギャング事件其他の犯罪は之が爲めと云ふ事があります。其のやり方が愈々益々猛烈を極めて居ります。なる程之では檢察機關は今に破産するかも知れませぬ。

非常時現在の最大難物たる此思想問題は、司法官や警察官に一任し置くべきではありません。教育家に一任して置いてもいけません。各家庭から覺めなければ、國も危ふし子女も危ふしと申ませう。家庭衛生が今日には必須なる常識である以上に、思想問題の判断力批判力は各家庭の常識でなくてはなりません。皆様に何分の御考慮を煩はし度いと存じます。

前口上は成るべく少くして直ちに中味に這入りますが、一寸爰でお断りして置きます事は、其中味も理論的に討究して居ては非常に手間がかゝり興味も薄くなりますから、寧ろ社會を直視す

る、人生を直視すると言つたやうな態度で、容易く根本に直入して戴く事の爲めに、自分自身の體験なり實感を基礎として、お話を進める事に致します。私自身の貧弱なる歴史に、語つて何の誇るべきものやある、然様な意味は毫末もないのでありますが、觀念を同うして戴きたい爲めに先づ以て自分自身の過去に於ける實感を辿り敘述的なことからお話を進めます。

自由平等の國

今から二十年程前、詳しく言へば明治四十三年の夏から大正二年の春まで、私は巴里に留學生として明け暮れして居つたのであります。其當時自分としては相當眞面目に事物の研究をもし考察をもした積りでありましたが、歸朝に際しては一つの新たな疑問を宿して歸つたのであります。留學三年、一つの疑問を得たりであります。疑問なからしむべく留學して、新たに疑問を宿して歸つたのであります。其の疑問と申すのは何？ 先づ以て其の疑問から申上げます。

足一度佛蘭西の國境内に入る者には誰にも目に付く筈の三つの言葉があります。それは自由、平等、親愛。リバーテイ、イクオーリテイ、フラターニテイ。佛語ではリベルテ、エガリテ、フ

ラテルニテと申します。此三つであります。是は人も知る如く、今より百数十年前、世界の動向を一轉したとも見らるゝ佛蘭西革命の標語であります。此スローガンをもつて革命を遂げたる新建国佛蘭西は、此三つの精神を以て立國するのだとあつて、佛蘭西國旗は之を象徴する三色の旗と致し、此三色旗をどこの役所でも屋上高き所に懸へすと共に、其正面玄關の入口には、此三つの言葉が入口の上部に弓形に並べて刻みつけられてあります。自由、平等、親愛、いとも厳かに此三つの言葉が何處でも入口の上には必ず大きな文字で刻み付けてあるのであります。此事は中央の各官廳は勿論、學校でも、兵營でも、村役場でも、津々浦々から、山の奥まで、佛蘭西國內である限り、公の建造物である限り、大でも小でも一つ残らず三色旗を屋上に懸へすと共に、入口には必ず是が刻み付けてあるのであります。ですから誰にでも必ず目に付く筈であります。

誰にでも必ず目に付く筈でありますから、小學校に通ふ子供の目にも付く、毎日通ふ學校の入口に嚴然と刻み付けてあるのですから、嫌でも應でも必ず目に付く筈、そこで假にそうした小學校の子供が、母親に對してこれに就て質問をしたと假定いたします。子供が、お母さま、自由とは何う云ふことでありますか、私は何をすることも自由なんでせうかと聞いたとする。之に對する

答は斯う云ふ事になります。吾が子よ、自由とは、自分がしたいと思ふことを人にも許して、相互に何等の衝突をも生ぜざる範圍内に於ける所の心委かせの行ひであります。佛蘭西人は誰でも斯うした自由を有つて居ます。今や佛蘭西には奴隷は一人もありません。お前も明らかにさうした自由を有つて居ます云々。佛蘭西人の自由の觀念とは、個人一個を中心としたものでなくつて今申した如く社會を對象としたものであることが、佛人の心裡特異性、短く云へば國民性と迄されてあるのでありますから、學者に言はせても俗人に言はせても、佛蘭西人が説明する限り、此の觀念に變りは無いのであります。さう云ふ説明を母親が子供に與へたとします。さうすると其子供は素直な子供なら分りましたと言ふでせう。分りました。それでは私にも自由があるのでせうか。そしたらお母さま、其の次の平等と云ふことはどういふことでせうか、是も私にあるのでせうかと聞いたとする。之に對する答も明瞭であります。吾が子よ、平等とは、權利を有し義務を負ふ資格の平等である。大人が如何に力が強くても、子供が如何に力が弱くても、男であつても、女であつても、權利を有し、義務を負ふ資格に於ては何の變りもありません。今や佛蘭西には身分によつて或る權利が有てるの有り得ないのと云ふ差別はありません。お前も大人も、貴族も、平

民も、一切が平等なのだとかうなります。法律學、政治學、社會學乃至小學校の教科書に至る迄此の説明に變りはありません。だから母親の答は必ずさうなるわけなのです。子供もそれを了解させよう。そこで子供は更に進んで、以上の事はよくわかりました。それでは私も大人も平等なんです。さらばお母さま其の最後の親愛と云ふことはどうなんでせう。フラタニティはと訊ねたとする。これには母親は答が出来ない、必ず行き詰る。さあそれはと返答が出来ない。さあそれはどうなんですと、若し其子供が強いて追究したとしたならば、窮餘の母親は、天に上りけん、地に潜りけん、其行衛は全く以て不明だと云ふより外はないのであります。これは如何なる佛人に訊ねても、相手が學者であらうと將た何人であらうとも即答は出来ない事なのであります。諸君御自身に如何なる書物を御覽になりましたもたやすく解決は得られないと言つた方が宜しい。今日どなたでも御承知であらうと思ひますが、經濟理論でも、社會學說でも、乃至は政治、公法の原理に於ても、自由と平等とは盛に強調されて居ります。佛蘭西ばかりではありませぬ、世界的に申しても自由平等が非常に進展したと云ふことが十九世紀以來二十世紀に互る歴史の誇りでもあるかの如くうたはれて居りますけれども、親愛が進んだとか退いたとか、此フラタニティを

取扱つたものは一冊もない、絶対にないと言つても宜しうございませう。

自由、平等、親愛と、三つならべて、それを獲得する爲に血まで流して革命戦を成就しながら其最後の大文字、親愛の一語に至つては、全然忘れられてしまつて居る事は、全く以て不可思議である。御承知の通り佛蘭西革命は世界の各國に波動して、大か小か其影響を受けないものは無いと言つてよいのでありますが、自由、平等、親愛の關係は何處も同じであつて、自由平等のみ盛に強調せられて、親愛のみは行衛が不明である。尤も自由平等に就ては、今母親の言葉として申した觀念が定説ではあるが、之を争ふ異論者が無いでもない。即ち自由とはそんな窮屈なものぢやない、絶対の自由である、何等の法律もなければ何等權力の制壓もない、絶対の自由を意味するものだと云ふのがある。即ち無政府主義者であります。又平等とはそんな資格の平等と云ふやうなごまかしものぢやない、物の所有の平等だと争ふものもある。即ちそれが共產主義者であります。そう云ふ風に、自由とはかうだ、いや、そんなものぢやない。平等とはかうぢや、いや、そんなものぢやない、と云ふ争はありますけれども、何れもが自由平等の範圍内に限られて居つて、親愛をどうしたと争ふものは一つも無い。其行衛は全く不明であると申す外ありません。そ

れが自分としては疑問であつたのであります。親愛は何處へ行く、過去百数十年の歴史に見れば世の進運は必然的に、人類の社會より此親愛と云ふ觀念を取り去り行くものであるかの如くにも見ゆる。果して文明の進歩は之を地上より拂ひ去るものであるか、どうか。それが自分にとつては大なる疑問として宿されたのであります。

佛都留學の三年、新たに疑問を得て歸るは之であります。恐らくは佛蘭西人でも一寸ものを考へる人には、これは疑問である筈だと思ふ。自由平等だけは今日の佛蘭西に於ても動かすべからざる公法上の原則となつて居ります。今日の佛蘭西憲法には之を公法上の原則とすると云ふ明文は置いてはありません。然しながら、たとひ明文には無くとも、現代に於ては嚴然として之は動かすべからざる佛蘭西公法上の原則となつて居つて、一切の法令、一切の議論は之を基調として割り出され、如何なる大政治家出でやうとも、自由平等の尊嚴を冒す事は絶対に不能と云つてよい。然るに親愛は何故に觀念に置かれぬのであるか、それは全く疑問であります。

大正二年歸朝の後は、極めて繁激なる職務に置かれてありましたので、疑問の研究などは思ひも寄らぬ事、忽にして十餘年を過ぎ大正十三年となつて、再び歐米視察を命ぜられ、若干日月を

巴里に滞在することになつたのであります。其時の用向はこゝには關係がありませんから省いて置きます。幾らか關係する所を申せば、當時一擧に世界を顛覆せんと、猛烈なる闘争を開始した第三インターナショナルの世界革命運動、及び之に對する諸國の對策は、視察項目の一つにして居つたのであります。再び佛蘭西に入り昔ながらの自由、平等、親愛の三文字を見る。新しく出來た建築物にも矢張り此三つの言葉は、嚴然と刻み付けてある。最後の一語だけは現代に於いては、無意味なるが如くなるに、習慣、情性のまゝに今も尙無意に刻みつけるのだなと云ふ風に眺めしめられる。それにしても社會の實相は如何に、少しは良くなつたかを見ると、正に大いに其逆である。世界大戰を中に挟んで前後の状況は何事にも可なり激烈なる變化があつたのであります。こゝに關係するもので言へば所謂階級闘争は非常に尖鋭化して來た。世の中が甚だ住み心持が悪くなつたと云ふことが出来る。過去を追慕する婦人の繰り言などは云はずもがなですが、何に致せ當時は大正十三年則ち西紀千九百二十四年で、佛國に於ける共產黨運動は其最高潮期に達した時である。其年のクリスマス以前に共產黨は愈々巴里に革命戦争を起すと云ふことが國の内外に喧傳せられ、是が爲め亞米利加から冬期を巴里に過す遊覽客は、それを畏怖して、倫

教に潜在を続け、佛國には這入つて來ないと云ふ海外電報が頻りに傳へられて居る。又自分に接觸する人とても、あなたは革命を恐れないのかと、眞顔で聞く人さへもある位で、以て人心の恟々たるを御想像願つて置きませう。一切の争議が激化せられ、一切の事物が巧妙老獪に示威運動の材料とせられる。ストライキなどは血を見ずんば止まない、血を見ても止まないと云ふ方が寧ろ適當でありませう。其爲め死人でも出來れば、それは忽ちにして街頭に持ち出して好個宣傳の材料とせらるゝ有様。詳しくは申し述べる時を持ちませんから、人心極めて險惡、社會は日日喧嘩、口論、鬭争に滿つの一語に依つて宜敷御察しを願つて置きます。従つて親愛の行衛は何處、世の進運は地上よりこれを奪ひ去るものなりやの疑問は益々之を深からしめらるゝのみでありました。かくて舊時の疑問を更に新たに大ならしめられて、大正十四年の夏歸朝致したのであります。顧みる歐洲の天地、正に是れ修羅の衢にも似たる哉であります。只住み工合が悪い計りでありませぬ、其爲めに上下相互の受くる經濟上の損失とても、容易ならざるべきは申す迄もない。

親愛の團體

斯くの如くして歸り來りたる其夏の或日、偶然私は姫路の東洋紡績に於ける修養團と稱する團體の支部發會式に參列する事になりました。當時に在りては、私は修養團なるものに就ては何等知る所なかりし次第であります。皆様の中には或は御存知の方もお有りかと存じますが、話の必要上、以下若干、修養團をめぐる其時のことを申し上げなければなりません。

修養團の支部發會式に招かれて、式場に臨んで、これはとばかりに意外の感を催したと申しませうか、甚だしく自分の注意を惹き付け、暫くの間は、我知らず佇立凝視せしめられたる所のもを見たと。何か？ 正面の壇上に高く掲げてある、二流れの大文字、修養團の標語がそれでありませぬ。何故それが然く強く自分の注意を惹いたかと申しますと、向つて右の一行は流汗鍛練とあり、向つて左の一行は同胞相愛とある。流汗鍛練は、力を込め心を込めて何事をも行する^{やこ}と云ふ事であつて、謂はば其手段、同胞相愛こそは團精神の中心たりと讀めるのでありますが、此同胞相愛が甚だしく自分の興味を惹いたのであります。なぜならば此同胞相愛と申す文字は、曩程來申し述べて居る所のフラテルニテ、親愛と申す文字と全然同意語である。フラテルニテのフラは兄弟を意味するのであつて、兄弟愛、博愛、友愛等と譯される文字で、同胞相愛と全然同義であ

る。リベルテ、エガリテ、フラテルニテと三つ並べてあれば、自由、平等、親愛と對句に翻譯しますが、字引を御覽になりますれば兄弟愛とも同胞相愛とも、又は博愛とも譯されてある筈、文明の進歩は親愛を地上より奪ひ去るものなりや、フラテルニテは何處へ行く、親愛は何處へ行つたと年來念頭に宿題とせる其親愛が、我れ此處に在りと云はぬ計りに嚴然と同胞相愛、しかも大きな文字を以て記されてあるのでありますから、これはと計りに自分の注意を惹いたのも當然であります。佛蘭西人は自由、平等、親愛と三つ並べて書いては居りますけれども最後の一語は消したも同然である。然るに今此修養團の人々は、彼の地に消へたる親愛の一語のみを置々と高く掲げて標語として居る。一體此人々は、之を標語として團結して如何なる事を爲しつゝあるのであるか、如何なる成果を擧げつゝあるのであるか、聞きたいものである、知りたいものであるとおのづからなる興味を感じる次第であります。

式後の休憩室に於て、自分は尙も想ひを歐洲の天地に馳せ、思ひを今見たる式場の光景に宿し沈思の状態に在つたのでしたが、偶々此支部の重要な役員であり、東洋紡績の役員である人から名刺を受け取つたので、其人に尋ねた。修養團があなたの方に這入つてから何か變つた事があ

りますかと、此問に對する答、それは皆何も彼も片端からですとある。其内一二の特徴を云へばと聞くと、さうですね、何も彼もですが第一職工の能率が非常に高くなり、貯金が又著しく殖えましたとある。之は聊か豫期して居なかつた答であると共に更に新なる興味を感じたわけでもあります、次の問は、さうした利益の爲めにあなたの方では修養團を此處へお入れになつたのですかと尋ねた。すると、イエ、決してさうではありません、とあつて以下何某と云ふ一女工が何處かで修養團の感化を受けて來たのが、朝は夙に起きて清朗なる空氣の下に團歌をうたひ、屋外に體操を爲すことより始め、終日其爲す所の事に出色なるものがあるため、初めは皆の者の笑はれ者であつたのが、漸次に他の者の感動共鳴する所となり、同志が一人増し、二人増し、三人増して、今日では此工場に在る三千人の男女全部が、一團となつて此發會式を行ふに至りたるものなりとて其の顛末を話された。之も亦自分には珍らしい事であつた。我國の事多くは上から仕向けて下が倣ふのである、下から始めて四圍を感化し上下を率ゆる等は稀である。益々以て興味を感じると共に此團體の持つ力の強味をも感ぜしめられたのであります、それもこれも中味を吟味すればさうある事に不思議は無い事にもなる。此時以後自分としては今一層修養團の事を知ら

んとして漸次修養園に接近したのでしたが、爾來に知り得たる所を以て修養園のあらましを一言せば――

修養園人は其標語たる、同胞相愛、流汗鍛練を主義として立ち、依て以て我が住む郷を善美化して一人の争ふものなく、一人の怠けるものもなく、總ての人が愛し合ひ、總ての人が汗して働き合ふ、新世界を現出せんと努力奮闘する、其爲め事の大小を論せず、苟も人の爲めとあらば片端から實行實働して行く、それが即ち自己の完成、社會向上の道なりとして居る。

彼等の信仰に依れば磁石の針は總て北に向ふやうに人間は愛せざらんとして能はず、働かざらんとして能はず、自然の歸結こゝにあるのだ。然るにそれが實現出來ないのは人の心が利己の汚れで邪魔されて居るからである。汚れを去るの道は愛を行^やする事であり、汗して働く事である。愛と汗との行者となれば逆境忽ち樂園となり、苦境おのづから歡喜の生活に化する事となる。讀書百遍意おのづから通ず、と云ふ事を自分は明言として居りましたが、修養園人の爲す所を見れば、實行百遍天性おのづから現はると云つた方が至言であると感ぜしめられる。其實行百遍が如何様にして行はるかかと申せば、一日一善と云ふやうなやり方である。例へば履物を脱ぐにも、

人に迷惑を掛けない様、人に世話をやかさない様にとあつて、上つた方向とは逆に脱いでおく。もしもそこらに散らかつて居る他人の履物でもあるならば、それをも同じ様に直しておくの類である。學生の遠足等、若い者が大勢野外で一緒に辨當でも用ひたしたら、そこらあたりは散亂したる新聞紙や、竹の皮なぞの屑で汚くなつて了ふのが常ですが、修養園の青年の野外の食事に、塵一本残して居らぬと云つてよい。辨當を包んだ新聞紙だの、竹の皮だのは、皆自分で持つて歸つて、捨てるべき所に捨てる。自分のもの計りでなく、人の残して居る竹の皮や、新聞紙だつて、一緒に持つて歸つて、捨てるべき所に捨てるのを喜びとする。ですから却つて汚い所も綺麗になる位である。これは彼等の喜んで爲す其の美化作業の一端ともなるわけである。一日の終りに、今日は何も愛の實行の機會がなかつたとしたら、疎遠な親類不幸な友達を心に求めて、手紙一本書く事だつて一つの行ともなる。即ち一つの爲樂ともなるわけである。斯う云ふ工合に如何に小さな事でもかまはぬ、手に觸れる所、心に浮ぶ所、片端から日に實行して行く事が彼等の所謂ギヤウ(行)である。流汗鍛練とは、眞剣力を以て何事にも従事すると云ふ事である。ですから紡績の機械にした所で二臺扱つたものが三臺扱つても餘裕があつて落度がない。能率の増進

勿論當然である。楽しみが善事を行ふ事に存する。自然に貯金も殖えるわけである。否能率や貯金の問題ばかりで無い。彼等修養團人の中からは其ギヤウによつて、素ばらしく立派な、偉人傑士とも見るべき人が、格別の教育も素養もなき人々、否廢殘の躰の持主からさへ續出して居る不思議さである。彼等の存する所、一村を美化し、一郷を善化し、一會社を美に、一學校を善に、將た又一家庭をも圓滿にと、至る所に其の成果を示せる實績は、奇蹟に似て奇蹟にあらざる事實である。一々それを爰に列擧する事は出来ませんが一斑を示す爲めに一例を申し述べませう。實は然様の事まで申述べる積りで来て居ませんかつたので、念頭に浮ぶ記憶のまゝを以て申し述べ外ありませんが、其のおつもりで要旨のみお聞取りを願ひます。

和歌山縣下の事であつたと思つて居ります。村が兩派に分れて抗争を續けて居つた。斯うした事例は鮮くない。眼界の狭い村人は、役場派とか、非役場派とか乃至は地域的な分立によつて吳越獨佛以上の仇敵感を爲し、無限に無益の鬭争を續續せるもの往々にして存する事は、どなたも御存知の事と存じます。此村も其類であります。之を憂ふる村の乙女、我が住む郷の平和を希ふて息まず、先輩に願つて聞かれませんので、村の神様だか佛様だかに、記録を見ればすぐ分り

ますが、熱誠なる願を掛けて、願くば村に平和を賜はり候へ、此村に平和の來る迄は斷じて自分は結婚をしないと云ふ誓ひを立て、日々朝早くから山に登つてお籠りをして、合掌精進の、平和を祈る鐘を撞く。初めの内は誰も介意はしなかつたのでありませうが、來る日もく乙女は止めない。哀れに響く其鐘が、到頭村人の頑な心を溶かし始めて、どうも我々の考へが悪かつた、相手が五だけの事をすればこちらが六以上に出る、すると相手は七以上に復讐する、斯くて鬭争は果てしが無い、何の爲めの鬭争ぞや、止めやうぢやないかと云ふ事になり、乙女は感謝せられ式を行なつて、村は平和となり、平和の爲めに撞かれた鐘は、之を記念に平和の鐘と名付けられ爾來は無音の響をも四方に傳へて居ると云ふ事であります。

修養團人の員數は現在内外各地に分布せる團員二十萬人、團友を加ふれば八十萬乃至百萬人にも達ませう。其實績に就ては鬼神をも泣かしめん實話が極めて豊富であります。今日は修養團のお話をしに來たのでは無いのでありますから、總てを割愛して以上に止めますが、以上申した丈けの事によりまして皆様には同胞相愛を中心の精神目標とする事の效果の如何は、御想像に難からざる事と信じます。私と致しましては之を見、彼を見る事によりて、積年の宿題之によ

りて解かれたりと観じたのであります。即ち曩に申した、留學三年、一の疑問を得たりを、今此團體の業績を見るに及んで、我れ悟らしめられたりとの感を致すのであります。どういふ風にか。

其の得失

佛蘭西革命の後を承けて佛蘭西人が自由、平等、親愛の三語を以て社會を再建せんとしたのは先づ以てそれでよろしいとする。然しながら其後の實行を、彼等が三語の最後の大文字たる親愛の實行より着手せずして、自由平等より出發したのが間違ひであつたと云ふ事です。彼等が若しフラテルニテ(親愛)の實現より始めたりしならば、今此修養園に見る如く、社會を美化し善化し得て獨り佛國のみならず歐米をも樂土と爲し、世界の文運に貢献する事偉大なるものありたるべきに、惜しむべき哉、彼等は其方途を誤まつて、正に其逆に、自由、平等の方から着手したものであるから、社會を、人生を、鬭争混亂の巷に導き、經濟上のみから見ても圖り知るべからざる偉大な損失を醸すに至つたのである。元來彼等が革命の後の最初の手はじめは、自由からにあつた。然るにそれでは忽ち社會は修羅の巷と化して、救ふべからざるものとなつた。そこで彼等は止む

を得ずして平等に這入つた。曩にも申した佛人の自由の觀念は、おのれが仕度いと思ふ通りを人にもさせてと云ふ事になつて居つて、それは本來の意義に於ける自由の觀念では無い。人と我とを對等に置く平等の觀念である。自由とは自我を中心とせる觀念であつて。おのれの仕度い三昧が十方無碍なるを意味する。彼等の定義する如く社會を對象とする筈のものでは無い。元來自由と平等とを同時に約束するものはイカサマ師であると云ふ言葉がありますが、實は其通りであつて、兩語は同時に兩立すべき性質のものでは無い。必然の結果として彼等は自由なるものを平等觀念化して、佛人の自由の觀念は斯くの如きものなり、是佛人の理性の然らしむる所と自得の様でもありますが、それは兎も角として、彼等の歸住せる其平等の觀念とても、社會を維持する所以のものでは無い。平等觀には常に争ひが附隨する。早い話が子供の兄弟喧嘩を御覽なさい。兄さんの方がうまい事をして居る、弟の方が餘計貰つてる、イヤ、さうでない、さうであると、兄弟喧嘩は常に平等觀から来る。元來人間は自分の持てるものには價值を感じない、人の持てるものは大きく見える、良ささうに見える。平等を目標としては喧嘩の絶へる氣遣ひが無い。宜なる哉。自由平等の國、議論雲の如く起り、法律雨の如く下つて、鬭争終止する時なく、社會を喧

噂の無限レールに乗り上げて仕舞ふ事である。其爲め益々親愛の觀念が淡く／＼と消へ行く事も當然過ぎる事である。彼等がもし自由平等より着手しないで、親愛の精神より出發したりとせば、いかに？ 修養團人は團服と稱して誰れも彼れも白いシャツを着、白い鉢巻をして居て、一見したる所にては、どれが職工だか役員だか、上下の見分けが少しもつか無い。おまけに行をして居る時は、雙方互に脊を揉んだり、肩を叩いたりして居るのであつて、相互の間は正に平等である。是れ只に服装や、そうした形式に於いてのみの事ではない、相互愛を基調とする以上、相互に人格の尊重もあり、思ひ遣りもあつて、我を貴いとし、彼を賤しとする觀念は宿らない。愛と輕蔑とは兩立しない。平等の觀おのづから至るのである。抑々他を愛する心をもつてする以上一切の行ひは他を喜ばせこそすれ害ふ氣遣は無いのであるから、己の欲する所を行ふて矩を踏えざるのみならず、多々益可なりであつて、十方無碍の自由あり、即ち親愛を基本の精神とせば自由も平等も其中に溶けて存して圓滿具足である。然るに自由から、平等から進んだのでは片端からぶつかる。佛人が自由、平等、親愛と三つの言葉を對等なるかの如く觀念して三つを平等に並べては居るけれども、それは大きな間違ひで、最後の其一語こそは他の二語とは比較にもなら

ぬ大文字、之さへあれば他は顧みずして可なりであつたのに、佛人は社會建設の基本精神を誤つたのであつた。爲めに圖り知る可からざる損害を世界の各地に及ぼしたのもあつた。これが即ち積年の疑問解決の端緒を爲すものであります。

自由、平等から始めたのでは親愛は逃げて行く、親愛即ち彼等の云ふフラテルニテから進めば自由も平等もおのづから具現する。否實は之を基本の精神とするにあらざれば社會は一切具足の圓滿境に向上進展するものではないと云ふ作用丈は、以上の言説盡さずと雖も、御了解を願へた事と思ひます。然しながら問題の解釋は尙これからである。即ち何故さうなるかの原理とでも云ひませうか、少くも其根源が明らかにされなければならぬ。摩擦すれば電氣が起ると云ふ事丈は實驗によつて割合に早く知り得る。それ丈の智識でも、相當に應用の範圍は開拓されませうけれども、尙其れ以上に、何故に左様な作用を來すかと云ふ原理が分らなければ、物足り無い。原理が分つて來れば應用の範圍は比較にもならない程極めて大なる進展をするわけである。社會建設の基本精神は自由平等であつてはならない、親愛でなければならぬ、と云ふ事は以上の事實により明白であります。何故必ずさうなるのであるか、其原理とも申すべきものを、手

短かな時間で詳説する事は私にはよし出来なくとも、其根本だけは、少くとも此機会に於て皆様の御一顧を煩はしたいと存するのであります。否、寧ろそれが主眼であります。話頭を一轉して御話を繼續致します。

生物の二大本能

今、此部屋に盆栽があります。盆栽と云ふものは随分といちめ付けられて居るに拘はらず、木の方では凡ゆる努力をして生存を續けて行く、それが爲めに小さな鉢の中に古木が存する不思議さを現出する様である。盆栽に似た自然木に、岩上の松がある。風致面白く歌人の好題目となるあの松が、石や岩の上でどうして育つかを子供の時、面白半分に関かれた事がある。點檢すれば不可思議なる程の努力が拂はれてある。日蔭の苔の間に根を入れ、水分を採つて年を過ごし、不斷の努力を繼續して、巧に岩の割れ目へを辿りつゝ、一丈二丈の岩をも繞ぐつて根を土中に下して居る。稀には石や岩を割つて居るものもある。松の木ばかりではない、繊弱な櫻の木にも石割り櫻がある。石を割つたのは水分であつて、木の根は巧みに其間を走つたのであるかも知れぬが

何に致せ異常なる努力である、又如何にも強い力でもある。然し之は松の木や櫻の木に限つた事では無い。一切の植物、一切の動物、一切の人類皆然りである。何れもが其生存を保たん爲には最善最大の努力をするのであつて、則ち之は一切の生物に通有普遍なる天賦の稟性である。是れ即ち學者の所謂自個保存の本能なるもの *Instinct de Conservation du soi* である。こればかりは人間としてならば如何なる人間でも、蔽ひ隠す事も出来なければ、奪ひとる事も出来ない所の天命其物である。此本能の存在を肯定する事は、どなたも異存のない事であると思料する。

それから又今一つ、道の邊に落ちた草の種は、藁でも蒲公英でも、何でも宜しゆうございますが、往々にして水分の涸渴の爲めに甚しく育ちが悪い、極めてチンチクリンであるのが、誰にでも目に付く事と思ひますが、そんなに育ちが貧しくてチンチクリンであるならば贅澤に花なんぞ付けなくつても宜かりさうなものであるけれども、さうは行かない、花は必ず付ける。小さければ小さいながらに、貧弱でもかまはぬ、花は是非とも付けないでは置かない。花は何の爲めに開く、媒合を得て種を繁殖せしめんが爲めである。花によらざる繁殖もありますが、如何なる方法によるにしても此繁殖の努力は是非ともやる。此點の努力も亦偉大なるものであつて、草木は勿

論、一切の禽獸、蟲魚乃至人類迄、生物一切に共通なる天賦である。これとても亦人間ならば、如何なる人間でも洋の東西古今貴賤貧富の分ちなく蔽ひ隠す事も出来なければ奪ふ事も出来ない抑壓不能の稟性である。學者之を名付けて種族保存の本能、Instinct de Conservation de l'espèceと稱する。此本能の存在も亦誰一人否定するものはあり得ない事、どなたも御同意であると思料致します。

今申した此の二大本能、種族保存と自個保存の二大本能、之は御承知の通り進化論の原則であります。即ち之は本來科學上の原則であります、科學上の大原則は同時に哲學上の大原則でもある。地球の引力と同様、嚴として動かすべからざる眞個の事實、眞個の法則である。如何なる生物でも此法則の支配から解脱する事は絶対に許されない天地の大法である。天地の大法である以上、吾人の觀察、吾人の推論、吾人の判断、一切の思索に之を無視する事は許されぬ。總ての考察批判は之を根本として出發してこそ確實性を有するものなりと考へられます。御承知の通り幾何學に公理と稱するものがある。大に大を加へたるものは小に小を加へたるものよりも大なりと云ふの類である。當然自明の理なるが故に推論證明の外に措く。そして之を根本の原理として

て出發して千變萬化の限りなき幾何學の窮理が展開する。

それと同じやうに人間に關する一切の窮理にも、此二大本能が正に其公理たるべきなりと思料する。如何なる窮理も之を根本として出發すべく、如何なる思想、如何なる學說理論も之に照らして正否を批判すべきなりと考へる。之を根本とせざる研究は、ピントを外れた寫眞みたいなものとなる、悪くすると無益な努力が迂路に拂はれ、果ては誤つて迷宮に這入る虞さへあると考へます。人によると斯うした見地に立つ事物の考察を好かない方があるかも知れぬ。不合理とは考へなくても、道徳も、宗教も、本能に持つて行くんでは感心しないと云ふ感をする人があり得ると思ふ。お察しはする。然しながらさうした人でもよく／＼玩味されたならば、決して之が道徳宗教の尊嚴を冒すのではないと云ふ事を肯定せらるゝに至る事必定なりと思料する。且つ少くとも現代青年に對しては、かうした現實確的な基礎に立つにあらざればです、現代青年の思索上の要求は到底満足せしむるわけにゆかないと見る。それは獨り日本に限つた事ではなく、世界萬邦共、現代青年に共通なる傾向なりと察せられるのであります。併し其邊の事は兎に角として、私の今日の御話は、議論の根底を此二大本能に置いて出發する事に致すのであります。

本能歸一

生物に通有なる此二大本能を立論の基礎とすべき事は、以上により御承認を経たる事と致しまして、今度は其直ぐ續きと致しまして、此二つの本能は、果して人の一般に見る如く二つでありませうか、一つでありませうか、御考察を願ふ事に相成ります。一つに歸するのではありますまいか、唯一無二のものではないでせうか、本能一元論とでも申す事になるわけであります。御吟味を願ひたいのであります。人類の本能は之を幾つにも數へる人がありますが、それは同一本能の形を異にして現はれたるものを一々別物にするからである。社交性を見ては團體本能を觀念し遊戯や好奇心を見て適應本能と名付くる等の類でありますが、さやうに一々別本能に數へたてゝ居ては果てしが無い、表面的なる其現はれを一步内面に入つて考察すれば、總てが根本に還元する事が出来るのであつて、一切合切が今申した二大本能に歸結せられ得るのであります。併しながら今申す此二大本能とても、更に一個に還元せらるべきではありませんまいか。此點の御考察を願ふ事が最も重要な關係を持つ事になります。私は之を一個に還元せらるゝものなりと見るのであります。

元來が種族なるものは、個體の集合體である。個體は種族の分身に外ならない。兩者は一體である。之を保存の本能性に二個の對立、相互不調和のあるべき筈もないのであります。人間にしましても、松の木にしましても、一個の松、一個の人間としての生命は有限である。鶴に千年龜に萬年の齡があるかないか知りませんが、あるにしても一羽の鶴一匹の龜の生命は有限である。之に反して鶴でも龜でも、松でも、人間でも、種族としての存在は無限であります。先づ先づ無限と云つて宜しい。何十萬年も経つたらば、どうか知れませぬが、吾人の今の知識の範圍では無限である。無限の生命と有限の生命、則ち個體の存在と種族の存在とが兩立し難き場合には、有限の生命を犠牲にして、無限の生命を保つた方が合理的なりとは、どなたも一樣に御考へになる事でありませう。それを合理的なりと吾人が一樣に考へるのも、畢竟するに我々の内に種族保存の本能が、個體保存の本能よりも、より強く働いて居るからだと云ふことにもなるのであります。その所は暫く後廻しにしまして、先づ以て、天然自然界を直視して頂く。そして其間に存する理法を見出して頂く事に致したい。天然自然の作用を無意に御覽になつても、實は兩者が

歸一する様に支配されてあると云ふ事を容易に観てとる事が出来ると存じます。論より證據で、手取り早く、一つ二つ手近かの事例を擧げて、それに御着眼を願つたらと存じます。天地普遍の法則なるが故に例證は何處にでも幾らでもあるのですから、手當り次第のもので間に合ふわけですが、手近かのもので、どなたも御存知かと思ふ事で申せば、鶏が卵を抱いて居る時を御想像願ひます。鶏と云ふものは家禽であつても、臆病なもので人にはあまり懐かない、人間が近寄りますと恐れて逃げる、主人を見て逃げるのは知が足りないからであります。逃げるのは自個保存性の致す所、然るに卵を抱いて居る鶏は決して逃げない。私は子供の時、徒らに刀を抜いて、脅かした事がありますが、鼻の先に白刃を突きつけても、断じて動かない。却つて其小さな嘴を斜に構へて抵抗する。双物の危険を知らないのではないらしい。手を差し入るれば、嘴で突つて我れに痛みを與へる。双物を入れたのでは、流石に突かない。然し嘴を開いて、攻撃的姿勢をとつて威嚇して居る。其儘刀で突き刺されたつてあれは動く事では断じて無い。生命を顧みないのであります。併し之は鶏ばかりの事でもない。これも自分の子供の時の事ですが、北海道には屢々馬が熊に捕られると云ふ話を聞いた。一體馬は足が早いのであるから、逃げたら宜さうなものだ

と質問したのですが、話を傳へた人は、それは全く其通りなんだ、併し馬が熊に殺られるのは仔を育て、居る時なのだ云ふ。乳呑兒を抱へて居る馬は、熊がやつて來ても逃げない、逃げるのに好都合な足を持ちながら逃げやうとはしないで、草を食ふ齒を以て熊に向ふらしい、だから一撃の下に殺されて終ふのだとの事、子を思ふ親の心は焼野の雉子、夜の鶴ばかりで無い事を思はしめられる。併し之は馬や鶏計りの事では無い。過ぐる東京の大震火災の當時、涙して聞いた話であります。或る母親が子を抱いて避難するのに、足は遅いし火道は早いしで、考へも考へたものだと思ふたのですが、壊れた指鉢で赤ん坊をふせて、自分の身體を其の上に横たへて、自分は焼けて死んでもよい此子丈けはと其子を助けやうとして居た悲惨な話があります。さうした話は一つや二つでなかつたのであります。皆様の方にも、斯うした類例は澤山に御持ちの事と存じます。併しさうした事は、其時ばかりに存する事でもありません。日常の社會生活にも無数にある事であつて、皆様の御記憶にも豊富に材料が存する事と存じます。

以上は手當り次第に簡易な事例を散漫に擧げたに過ぎませぬが、冗長を避ける爲めこれ以上列擧する事を差し控へます。ニュートンは林檎の落ちるのを見て地球に引力のある事を發見したと

傳へられて居りますが、それなら皆様に對しては鶏の話だけでも充分であつたのでせう。事例を列挙する事をやめにして、直ちに之に對する若干の所見を申述べる事に致します。特に御留意を願ひたいのは、例へば今の鶏の話で申せば、卵を温めるのは、種族保存の爲めでありませう。其種族保存の必要の前には、鶏が生命を顧みて居ない、即ち自己保存性が消えてしまふと云ふ事でもあります。勿論これは鶏ばかりではありません。御覽になりましたる通り、種族保存の必要の前には母親が死ぬる、馬も死ぬる、鶏も生命を顧みないのであります、之が一般共通の天性となつて居る。餓虎の例へもある通り、一切の動物は、自己の保存には狂的なる慾を有つて居る。如何にも自己保存性の強烈さを觀せしめられるのでありますが、其強烈至極の自己保存性も、種族保存性の必要の前には忽ちにして無力化してしまふ、消えてしまふ、こゝが見逃してはならない所であると思料致すのであります。即ち私の云はんとする所を端的に申せば、各本能中、種族保存のみが最強最大なるものであつて、他は皆之が従たるに過ぎないと致す事でもあります。繰返して申します。強烈なる自己保存性、草木を以てして岩石をも打割る力の自己保存性が、種族保存の必要の前には、忽ちにして無力化する。之は今御覽になりましたる通りであります。

併し之は今申した様な生死擇一を要する場合に限つた事ではない。其餘の尋常の場合にあつても常に然りである。例へば尙も鶏で申せば雛を育てる雌鶏は良き餌を啄ばんだときでも自分で食しはせぬ。わざ／＼落して雛に食べさせる。所謂育兒即ち種族保存の本能の顯はれを見るのであります。雄鶏とても亦同じこの良き食物を得ても往々にして自分は食はず、雌を呼んで之に與へる。雄鶏の自我性は此場合之も亦種族保存の爲めに消える。併し斯うした事は勿論鶏ばかりの事ではない。皆様に於かれても、種々の機會に之に類する種々の事柄をあらゆる動物について御覽になつて居りませうから、時間を急ぎますから總ては任意の御類推に御委せ致しますが、高等なる動物へと進むに隨つて此事漸く其度を加へ、人類となつては飛び離れて其度極めて高しでありませう。此自我性の消える各場合を、綜合して觀察致しますると、結局自己保存性なるものは種族保存性の必要に應じて消長するものなりと云ふ結論に到達するのであります。それと共に元來種族は個體の集合體であり、個體は種族の分身に外ならないのでありますから、種族の強化は是非共個體の強化によらなければならぬ。それだから自己保存性が甚だ強く天賦されてあるのは種族強化の爲めに外ならないのだと云ふ事をも理解せしめられるのであります。そこで私は此の

二大本能を對比して、種族保存性が主である、自己保存性は従であると申すより以上に、種族保存性が一切の本であつて自己保存性の如きは其一作用たるに過ぎないものだ、本能は唯一であると敢て申すのであります。何も馬や鶏が、教育教化によつて其各場合にそうした覺悟なり決心をする心理作用を起すわけでは無い。自然が之を然らしむるのである。故に之は全く以て天稟であり、天の理法なりと致す外ないのであります。

以上の所説は論理の形式を辿る餘裕を持ちませんでしたから、推論甚だ粗でありましたが、賢者には一語にして足ると申します。ニュートンには林檎一つで澤山である。申上げた筋道は粗笨であつても、皆様の明智で充分なる補ひをつけて頂いて宜敷く御判断を願ひ度いと存じます。

本能と心身の活動

以上により、生物の本能は一元に歸するものなりと云ふ事の御承認を願ひ得たと致しますればそれに續いて今一つ此の間に差挿んで一言御承知置きを願つて置き度い事があります。それは人間一切の心身の活動は、總てが本能に包括せらるゝものであると云ふ見方であり、御承知の

通り人間の意識的動作を、本能に因るものと知能に基くものとの二つに分けて、兩者を別物に見る人が少くないと存じます。又今申す通り兩者何れもが、本能に包括せらるゝものなりとの見方をする人もあるわけであり、私と致しましては後説を然りとするものであります。其事は今迄御話した間にもおのづから散見して居る所もありますので、已に御承知の事かも知れませんが、念の爲め一寸爰で御断りして置くのであります。

再言致しますれば人間の一切の心身の活動は、總てが本能の作用本能の支配を免れ得るものは無い。如何に之に逆行せんとしても、それは天の理法に反くものであつて、成り立たないと見るのであります。此點は御断りしておく丈けに止めて置いて、議論は致さないつもりであります。併しどんな風に我々の活動が支配されてるとするか、其一端を示す爲めに、一事例を擧ぐる事に致します。世界大戦當時の事を想起して頂きませう。

世界大戦の當時、獨逸は屢、潜航艇を放つて、英米の大商船を洋上に撃沈した。其際時々あつた事ですが、乗客は往々にして婦人や子供丈けを總てライフ・ボートに乗せて避難せしめて、ボートが足りなかつたのでせう、男は總て皆船中に居残つて海底の藻屑となつて居る事跡がある。

之が如何にも立派な男らしい行ひであると云ふ事に誰も異存は無いのでありますが、これに對して英吉利の文豪バーナード・ショウと云ふ人が解説を試みて居る。ショウの此言説は我國の新聞紙にも翻譯されてありましたので、御存知の方もおありかと存じますが、バーナード・ショウがそれを解説して申すのに、あの場合、男子が擧つて、あゝした行爲に出でたのは非常にギヤランタリーな、義侠的など申しませうか、男らしい行爲だとされてゐるのは當然だ、併しそれは何も不思議な事ではないのだ、あれは人間自然の性情である、種族保存の本能が之を然らしむるのだと申すのであります。即ち男が生きのびたよりも、女子供を助けた方が、種族保存上宜しいから種族保存性の然らしむる所として、あゝした場合、おのづからさうする氣にもなるのだと申すのであります。震災に於ける揺鉢の上の母親、育兒の爲め卵を抱いて居る牝鶏と同じやうに、あゝ云ふ心理状態がある場合自然に生れて來るのだと申す事になるのであります。心理状態でありますから、知的的活動でありますから、其發達の高下により、所爲に高下の差等の存する事は勿論でありませうが、所爲の高下の如何にかゝはらず、あゝした行動が、種族保存の本能の然らしむる所であると云ふ事は否定出來ない事でありませう。バーナード・ショウに従へば、古來戰爭に

は常に男子が行くことになつて居る、極めて例外の場合の外は戰爭は男の仕事になつて居る、これは野蠻人でも文明人でも變りはない。何故かとなれば戰爭であれば生命が的だから多くのものが死んでしまふ。さうすると男が戰爭に行けば、男が少くなる譯である。そこで少數の男と多數の女とが、生き残る事になるのであるが、一國一民族について少數の男と多數の女が生き残つた場合と、其逆に多數の男と少數の女とが生き残つた場合とを比べて見たら、どちらが種族保存上望ましい事であるかと云ふと、それは無論の事、男は少數でも女が多數に存在して居る方が繁殖上宜しいに決つて居る。それだから昔から戰には男が出掛けて行くのだと云ふ。尙彼は英吉利人は今の所一夫一婦を尊重して居るけれども、若しも今非常な大戰爭か天災があつて、男が一人に子女が平均十二人とでも云ふやうな比率に人口がなつて了つたとしたならば、無論の事、世論は一夫多妻を主張是認するやうになるに決つて居ると云ふ。尙其外に一體是は必要もない事ですが彼は一夫一婦と云ふやうな事は一體女の方から主張するのぢやない、女は元來一夫多妻でもかまはない、偉い人物と一緒にになりたいのである。一夫一婦を八釜しく云ふのは女の方からではなくて、あれはヘナチヨコの男が云ふ事なのだ。ヘナチヨコな男はそれを主張しないと彼等にはお鉢

が廻らぬからだと迄申したので世上に聊かショックを與へた様でもありませんが、私はバーナー・D・ショウの云ふことを盡く是認する譯ではありませんが、人間の一切の心身の活動が總て本能性に基くものなりとの其見方に就ては左袒致すのであります。赤ん坊は乳を飲む事を生理衛生上有益なりと判断して飲むではありません。併し生長した人間は滋養衛生の上の効用を認めて牛乳をも飲みます。併しながら其何れもが自己保存の本能の致す所たるの點に於ては變りはないのであります。戦争には男を出すと云ふ事が種族保存上有利なりとの事を意識して、さうすると否とに關係なく、基く所は同一の本能に歸する事を認めてよろしいのでありませう。

正邪善惡の標準

人間の心身一切の活動は、總てが本能の支配を免れざるものなりと致すのでありますから、智情意の働きも、眞善美の鑑別も悉く本能に包括せらるゝ事になるのであります。それ等を逐一解説する事は皆抜きにして置きまして、善惡の觀念、即ち正邪善惡と云ふ事丈けを中心として、以下若干の御考察を煩はす事に致し度いと存じます。

惡とは何ぞや、善とは何ぞや、之を各種學者の定義に求めますと、何れもが洵にむづかしい事になります。中には定義だと云へるかどうかと思はるゝ程長々と其特長を羅列したのさへ見受けるのであります。中々要領を得ないものになるのであります。お互に暫く學者の見地からは離れて、事物の實相に直入して考へて見たいと思ふのであります。先づ以てお互の通念に於て、惡と名づくるものは何でありませう。私の領分であります所の犯罪人で申せば、現在日本の刑務所に居る其總數は五六萬であります。これ等の人間の中には、職業的犯人と呼ばれるものもありません。常習常業として犯罪しかやれない男です。是等の人間は惡人であり、其爲す所の事は惡と云つて宜しいのでありませう。之を暫く惡の標本として眺める事に致します。多數犯罪人の中には、恩を仇で返して、財慾の爲めに親兄弟乃至親切なる隣人を殺害すると云ふ様な甚だしく非道なものもあります。惡に相違ありません。又さに非らず、可愛さうな動機で犯罪を爲すに至つて居るものもあります。泥坊にも三分の道理ありとか、犯罪人を出だすのは社會の罪だとか申す通り、其動機、原因に就ては同情すべきものもありません。色々種々千差萬別な過程を経て、獄裡の人となつて居るのでありますが、併しながら煎じ詰めて之を考察いたしますと、彼等には

一つの共通なる點がある。即ち一人として例外のない共通なることは、自分のことばかりを大切に考へて、人のことは一向に頓着しないと云ふことが、其通有性となつて居ります。自分のことばかり考へて、人のことは絶対に頓着しない、或は甚だしく頓着しないのであります。人の物を盗んで来て自分の物にする、便利なる事此上なしであります。人を欺かして財物を騙取する。自分のみを中心として云へば、最も賢明な方法である。他人が其爲め零落するのはかまはない、甚だしきは被害者が死を擇ぶ運命に立至らうとも人の事は頓着しない、自分さへ良ければそれで宜ろしい。則ち一切が自我のみに生き、それのみ終始し他を顧みないのが其特徴である。世の中が其爲め如何に迷惑しやうとも、それは知つた事では無いのであります。ですから其爲す所を綜合考覆すれば、これ等の人間は自己保存のみしか意識しないのだと申す事になります。換言すれば自己保存の本能から直射する所の思想感情の支配にのみ服して居つて、種族保存の方面には心身の働きのない、寧ろ其方面には逆行して居るのでと申す事になります。

悪人の所業がどれ一つとして自己保存の本能即ち自己愛のみに偏倚せるものならざるなきに、悪人の正反對に立つ人々、我々が稱して聖人君子志士仁人と爲して敬仰する人々、即ちあらゆる

人間の美點善徳を發揮した方の人々の事を考へて見て頂きますと、誰一人として、手取早く云へば、人の爲め即ち同胞愛換言すれば種族保存の本能に即したる所の思想行動をして居るものに非ざるはない事を見出します。身を殺して仁をなす、仁より大なるはなしと云つて何も心中したつて大して偉くはない。人の爲に、同胞の爲に之を愛して身を捨てるので貴いのである。爆彈三勇士の莊嚴さも同胞の爲に捨つる生命であるからで、自己の生命を顧みないで種族の生命を中心としての行動のみが、聖人、君子、志士、仁人の事となつて居る。して見れば一元の本能、生物最大の本能たる種族保存性に即したる行動が總て善であつて、種族保存性に逆行する自己保存性の發揮が總て悪だと云ふ事になる。定義としては文字はどの様に選んでも宜しう御座いますが、觀念はこゝに歸着すると致すのであります。正邪善惡識別の標準、唯是れあるのみと致すのであります。どなたも御同意下さる事と存じます。

種族保存性が遺憾なく顯現せらるゝ人を善の極として右の端に置き、自己保存性しか發揮出来ない人間を惡の極として左の端に置き、其間を連ねますと、其中間が一分刻みの程度となつて千差萬別無数の人格が存在する事になります。右による程愛他的となつて人格高く、左に近づく程

自我的エゴイスタックとなつて人格低く、人心の異なる事、其の面の如しと云はるゝ雑多の相を現する事にもなる譯であります。即ち種族保存性に順應する程度の如何によつて人格が定まる事になる譯であります。

斯様に申しますと或は一つの問題を惹起する事になるかも知れませぬ。即ち君の云ふ様に一元無二の本能として種族保存性が人類を——動物一切であります、此場合人類でも宜しう御座いませう——人類を支配せるものならば、何故に人格の低い、自己保存性のみしか發揮出来ない様な人間が、此の世の中に善徳の士と共に併存することになるかと申す事でありませう、一語致します。

人格の劣等なる人間も又犯罪人の大多数とても、總てが教育教化によりて、即ち其知を進める事に依りて、本性を發揮せしむ事が出来る。換言すれば善化する事が出来るのであります。此の教育教化によつて改善する事が可能であると云ふ事は、則ち其天性が、相互愛、換言すれば種族保存に存すると云ふ事の明白なる證據と致され得ませう。家鴨に空飛ぶ事を教育する事も不能である。鳥に鶴の眞似をさせる事も出来ませう。天稟に反するが故であります。人間が容易に教

化し得るのは天稟なればこそでありませう。併しながら不能と見らるゝものが無いでもありません。犯罪人の極く小部分は改善不能と見らるゝものなきにあらずであります。私はそれは甚だしく困難ではあるが、人間である以上改善不能ではないと存じますのであります、學者間には定論とはなつて居りません。併し一切の人間に對する改善能否と云ふ様なメタフィジックな問題は別問題と致しまして、教化改善が不能と見らるゝ程、至難なる者の存する事は事實であります。斯様なものを何と見るか、刑事學者は斯様なもの即ち先天的犯罪者とも申すべき様なものを、人類の進化に後れたる人間であると致して居ります。進化に後れたのであるか、或は變態的な存在と見て宜しう御座いませう。事實、然様なものは數多くはありません。監獄に在るもの全部を數へましても六千萬同胞中、五六萬であります。其内改善不能と見らるゝ者としましたらば、其何分の一になりませうか、或は何十分の一になりませうか、極めて少數であります。然様な少數なる例外は總ての生物に就て常に存する事でありませう。八重の櫻花には雄藥が全部花瓣と化して、見ても美でも花としての機能を發揮し得ないのがあります、改善不能の惡人などは蓋し此類であります。本能は普く生物を支配して居り、一切の動物は一樣に種族保存性の支配を受けて居

ると見られるのでありますが、心身一切の活動として現はれるのでありますから、知の發達の如何により著しき相違を生ずるのは止むを得ませぬ。誰れも知れる通り飛んで火に入る夏の虫もありませんが、之とても自己保存性が無い譯ではありません。知が足りないのであります。夫婦親子の愛につながる家族生活、之は如何なる人類でも、文明野蠻を問はず人類である限り總て此生活を営むのでありますが、他の動物になると、只僅かに亞弗利加に住する猿族に、家族生活を爲すものゝあるを見出だす事が出来るのみだと申す事ではありますが、他の動物に家族生活なきを以て種族保存性なしとする譯にも参りません。天賦の本能は皆總てが之を稟けて居りましても、知の發達の如何により其現はれには種々の別を生ずるのであります。人格の高下徳性の大小皆是れ知の發達の如何による事なりと致します。此點より見れば人格低劣治し難き悪性の者などは、進化に後れたる人間と觀察すべきでもありません。此の甚だしく進化に遅れたるものあるに依つて人類通有の天稟を否定するわけには参らないのであります。事勿論であります。以上申す所を、要約致しますれば――

心身一切の活動は、總てが本能の支配を免れ得るものではない。本能としては種族保存性が、

最強唯一である。之に順應する思想行動が總て善である。正邪善惡識別の標準唯是あるのみ。と申す事に相成ります。これは假定や想定ではありません。天地間の實相を如實に觀察致したのであります。そして實は、善も美も眞も皆同様なり、且つは又、種族保存の現はれは總て愛であり、愛は即ち善と致すのでもありますが、細説を用ひません、御高察に御委せ致します。

天賦の稟性、善惡の標準、則ち茲にありと致しまして、先人の思想行動を吟味致しますれば、是非善惡正邪當否が總てハッキリと致して参りますのであります。則ち之を以て「思想問題判断の鍵」と致す譯であります。以下若干其の適用を試み度いと存じます。

孔 夫 子

種族保存の本能が奪ふ可らざる天賦の稟性であつて、之に順應する事が善であり、之に逆行する事が惡であると申す此の見方は、實は私によつて始まりたる事ではありませんで、先に已に其人あつて存するを感ずるのであります。それは誰あらう大聖孔夫子であります。孔子様であります。孔子様はニュートンが地球に引力のある事を發見したと同じ様に、一切の人間は種族保存の

本能に支配せられてある、之れが天地間の大原則であると云ふ事を發見致されて、而も之はニュートンの法則と異なり之を知つて之を行ふと否とにより、人類の幸不幸、社會安危の岐れともなるので、目を開いて之を見よとばかりに、それを專念教示せられたのであると思料致されます。素より孔子様は種族保存と云ふ言葉は用ゐられなかつたのでありますが、本性又は天性と云ふ語を用ゐられて居ります。天賦の稟性を短く云へば天性又は本性であります。インスチンクトと申す言葉も、本能とも本性又は天性とも譯されてある文字であります。

そして其説かるゝ所によれば道は夫婦の端に發すであります。如何にも種族保存は男女の愛、兩性の結合を根本とする。それから親が子に對する愛は程度に多少の差こそあれ、禽獸と雖も均しく有する所であつて、之は多く力説するを要しないのであるが、子が親に對する愛となると動物中知能の低いもの程早く消滅する。燕の親は悲しいと云ふ話がありますが、燕の母が虫を獵つて自分は食はず、多くの子供に順次に與へて、日數を重ねて、母瘦せて子漸く肥えたりと申す時になり、羽翼初めて備はるに至れば、子供等は忽ち風に從うて飛び去る。空しき巢に止つて、母は子を呼んで歎き悲しむのでありますけれども、子供等は決して戻つては來ない。悲しい母の例

となつて居ります。高等なる動物になれば親子の親しみも幾分か高まりますが、其程度は概して甚だ低級である。人類以外の動物中家族生活を爲すものゝ如きは僅かに猿族に存する例外があるばかりであるとの事。但し人類に在りても人格の低級なる者程親子の親しみも薄く、他人に對する愛は尙更乏しいのでありますから、孝を説き之を百行の本と致されて教を立てられてある。然れども孔子の説かるゝ其孝たるや、所謂愛其ものである。御弟子の曾子が、其説かるゝ孝の徳の甚大なる事を驚異嘆美したる如く無邊に徹底せる所のものであつて、人類天稟の本性たる愛が、初めて父母親子の間にひらけて孝道となる。此孝道は其儘知己朋友乃至一切の隣人に對する愛となり、四海萬民に及ぶ博愛で、孔子は之れが大虚の神道造化の徳、人に在つては萬善の淵源、百行の本となるものなるを見、且つ之を示されたのである。故に上は天子より王侯士大夫乃至庶人に至る迄、一切の人の道はこれ以外には無く、萬人之によつて本性の親愛を興起すれば、五倫和睦、社會は全體が幸福だ、齊家治國平天下總て只之に依存するとせられる、如何にも其通りである。而して明らかに之を天地之徑義、則ち天の理法なりと指示せられてもある。如何にも殘る所なしである。尙又甚だ敬服する事は、身體髮膚之を父母に受く敢て毀ひ傷らざるは孝の始めなりであ

つて、自己の身體を損傷する事なき自己保存の本能の働きも、孝道則ち博愛の道、換言すれば、種族保存の始めと示されてある。即ち自己保存性が種族保存性の内容である事を強調するのは、何も自分に始まつた事では無い。何時の昔に孔子様は明らかに之を示されてあると拜を致すのであります。尙孔子様の卓見では、之は人間の天性である本性であるから、教示する事により又は修行する事により成就し得べきものであると致され、敢て之に悖るものを是正する事に就ては、天堂地獄の禍福を以て誘はんとは致されず、天の理法天稟の本性に順ふものは榮え、之に逆らふものは亡ぶるの理で「順天ハ存シ、逆天ハ亡ブ」と示されてあるに止まる。實際其通りで、婦人が自己の美又は自己の娛樂を損せざらんとして、子を設ける事は御免だと云ふ様な自己本位なものとなり、男も亦子供の無い方が氣樂で良いと云ふ様な利己的なものとなつてしまつては、人口減少、種族は存在を失ふてしまふ外はない。現に國土残つて山河徒らに存すと雖も國人なくしては我國何れにありとすべきやと云ふ歎息は、人口の増加せざる佛蘭西政治家の憂でもある。類例を求むれば幾らでもありませう。前世紀の動物で化石や骸骨ばかりになつてのみ見らるゝものが澤山ある。御承知の通り馬鹿に大きな圓う體をして居りますが、今日の地球上に残存せるものは甚

だ稀である。何故にあゝして巨大な軀體を持ちながら、生存競争に勝利しないで滅亡したのであるかと云ふ事が學者の疑問とされてゐる由で、之が解答として過日新聞紙に亞米利加の某學者が彼等は身體が餘りに巨大に發達したが爲めに、食物が不足し、終に食料難で滅亡したのだとの推測説を發表し、之が新説として紹介せられてあつたのを見ましたが、私はそうした學者ではありませんが、其推測は誤りであらうと思ふ。食料不足、榮養不足なら身體は弱小に變化する事、道の邊の董の如きもので、それが代々續けば琵琶湖の鮎みたくに小さくなるのが當然でありませう。彼等の亡びたのは其の學者の推測の如くでは無くて、それ等の動物は自己の身體を巨大にする事のみ多くの努力が向けられ、換言すれば自己保存のみに専ら其力が注がれて、種族の保存には多くの努力がむけられなかつたが爲めであらうと思はれる。現に現存の前世紀動物も多くは身體は異風に大きいけれども、繁殖力は甚だ鈍いのである。個性愛に長じて種族保存の方からは逃避して居ると思はれるのであります。素人考へを並べたてゝは相済みませんが、私は優生學なるものを知りませんのですけれども、時々聞く其話には、これをサンガリズムと結びつけて説く人がありますが、もしそれが個體の優生をのみ眼目としての考へ方であつたならば、今申す前世紀の

動物同様、滅亡の端を開くものなるべしと存じます。

弗の國亞米利加に斯の如き人ありやと驚異せしめられる哲人エマーソンは、孔子を世界の哲人なりと崇敬して居る由であります。エマーソンが如何なる意味に於て孔子を世界の哲人と爲すやを私は知りませんが、私と致しましては、孔子が強いて天堂地獄の禍福を云はず、順天存、逆天亡。何處迄も天の理法、人類の本性を正視して、之に順應する事により人間は向上進歩完成せしめられる、又之に順應せしむる事に就ても、本性正視で可なりとして方便は用ゐられない、無智の民に逢うても動ぜられざりし所に哲人の哲人なる尊貴を感じるのであります。實際の處、佛教でも基督教でも、信者に徳性を涵養し得る所以のものは天堂地獄を説くが爲めにはあらずして、其教化なり、修行が、根本に於て天の理法、人類の本性に即して居るが故なるべしと想はるのであります。孔子の所見が必然的に性善の説となる事は茲に改めて申す迄も無い事でありませう。

荀 子

孔子の説に反する所の考へ方に、荀子の性悪の説があります。性悪の説を初めて聞いたのは中學時代の事ではありますが、當時私は先生に向つて、一體性悪の説を唱へるなどと云ふ事は、甚だしく人間社會を毒する事でないかと申したのでした所が、先生はそうばかりも云へない、あれは理窟があるのだと云はれる。どう云ふ理窟があるのですかと問ふと、其性悪の説の因つて立つ所は、人間は良いことをしよう／＼と心掛けても、悪い事をした／＼と思ふ根性が下から突張つて出て来てやまぬ、どうしてもそれに抵抗出来ない傾向がある、故に人間の天性は悪なんだ、義は偽なりで、義理の義の字は虚偽の偽の字で、善行をすると云ふ事は、天性を偽つたことなんだと云ふのであるとの説明。成程仰しやることは理窟であります、それでは伺ひますが、先生は性悪の説をお採りになるのですか、性善の説をお採りになるのですかと詰寄つた所が、さあそれはどつちとも云へないねえとある。此漢學の先生は相當出色の人として尊敬されてた人ではあるが、文字の講釋は出来ても性善性悪何れを可とすべきやは判断が出来ないらしい。併しそれは事物の根柢を見ないからであつて、今申上げた善悪の標準に照らせば取捨甚だ容易でありませう。性悪の説、即ち悪い事の方が兎角にしたくてしたくて、しやうが無い根性が出て来るを見るのは自己保存の本能の働きのみを見て居るからでありませう。之に打ち勝つて正しき事を行ふのは種

族保存の本性に適従する事なのであつて、偽でも何でも無いのでありますが、之を偽と見るのは學問はあつても聊か進化に後れたる部分が出来損ひの櫻の花みたいに向頭の中に残存して居るからでありませう。種族保存の本性に立脚しなければ社會は一日も成り立たないし、人類も亡びる譯である。さうした利害を考計せずとも天の理法彼にあらすして之に在りである。性善、性惡、何れを採るべきや何の躊躇もいらぬ筈であります。

スペインサー

荀子と品類を同うするものに英吉利の哲學者スペインサーがある。どなたも御存じの事と思ひますが、スペインサーに従へば人間を支配するものはエゴイズムである。利己心のみである。人間一切の行動總て皆是れ此の利己心の發動のみとするのであります。ですから親が子に對する愛、即ち其犠牲献身の誠を致す愛を見るに及んでは之を説明するのに甚だしき無理が生ずる。彼は之を説明して申すのに親が子を愛するのは道樂である、さうする事が親自身の欲望に適するからさうするのである。即ち之も利己心の發動に外ならないのであると申すのであります。甚だ無理であ

る。此議論を推し進めて云へば、聖人君子志士仁人身を殺して仁を爲すのも道樂だと云はなければなりません。勿論の事一切の人間は己の撰擇する所の行爲をするのである、其時其場合に於て自分の満足する方向に動くのである。然れども他を害し人を不幸ならしめて己を利する事、それが己れの満足であるのがエゴイズムであつて、人を愛し人を幸福ならしむる事が己れの樂しみであり満足であるのが、所謂オストルイズムである愛他心である。それは利己心の發動とは區別さるべきものに屬する。スペインサーは味憎も羨も一緒にして居る事になります。これも畢竟自己保存性をしか見ないから、正しき解説がつかないのであつて、其自己保存性をしか見ない點、最強最高の種族保存性が眼底に映ぜざる點は、荀子と類を同うするものとなるわけであります。西洋の學者には此類が少くないと存じます。現代に於て殊に然り、小なる我れ即ち個性の發見以上に出づる事稀なる點が其通弊であると思料致します。

ベンザム

法理學の大家にベンザムがある。其法理論の根本原則は人の普く知る如く、最大多數の最大幸

福と申す事にあります。ベンザムは最大多数の最大幸福と云ふ事が正邪善悪一切を判断する尺度であると致して居るのでありますが、何故に最大多数で我慢しなければならないのであるか、何故に全體の幸福ではあり得ないかを私はベンザムに訊ね度くなるのであります。幸福と云ふ字の意義にもよりますけれども全體の幸福と云ふ事であれば、先づ以て正邪善悪の標準として良いでせう。それならばです。即ち全體の幸福と云ふ事であれば、種族保存の本能に順應すると云ふ事と結果に於ては同一に歸しませう。最大多数と稱し、假令一小部分でも、取除けのある事は、窮極に於ては全部の破壊になると存じます。併しながらベンザムが不可避免的に小數者の犠牲は忍ばざるを得ずと爲す所以の理由は極めて明瞭であります。彼に在りては總ての人間は他人の利益を犠牲としても自己の利益を追求して止まない傾向を有するものであつて、之を彼は動かす可からざる人間の天性だと見て居るからであります。併し人間の天性を然様なものに見てしまつては相互不斷の争鬭相剋絶ゆる時なしであつて、全體は勿論、最大多数も、最小多数も、共同の幸福と云ふ事は終には得られなくなるのではないでせうか。所謂利害の衝突なるものは、其實止むを得ざるものにあらずして、多くは知の狭小なる我慾の製造である、如何に控へ目に見ても人間は互

に相害せんとする心事よりも互に相害せざらんとする心事の方が比べて見たらば到底比較にはならないのである、否寧ろ相助けんとする傾向の方が遙かに豊富であればこそ人類は現在に見る如く、他の獸類に優勝して存在繁榮して居るのもある。人類の社會はどこ迄も相互の助け合ひで成り立つて居るのが眼前の事實である。大法眼底に入らず、ベンザムも亦、荀子、スペンサーと同じく偏奇せる自己保存の本能のみを凝視して、知見の至らざるものありしを惜しむと云ふ事になるのであります。

マルクス

次に御承知のマルクス、彼は獨逸に生れ、佛蘭西に學び、英吉利に浪居したる猶太人である。従うて其所説に佛獨英猶四個の因子の混合を見るのでありますが、其主張の大眼目である所の革命によつてプロレタリアに政權を奪取し、其獨裁を以て新社會を打開すると云ふ結論は、彼自身の理論から生れたのでは無くて、彼より先に在りたる佛蘭西の先輩たる學者の主張を其儘採つたものであると致されてあります。結論が先に出來て居て理由は後からクツケたのだとの事であ

ります。結論が先に在つて理由が後からつけられたのでも兩立の間がシツクリ合致して必然の關係に在れば問題は無いのでありますが、彼のは兩立の間に必至關係が無い、無縁故ではなくても甚だルーズだと見られる。従つて彼の理論の方は飾り物みたいな附屬物で顧るに足りないとは申しませんが、手ツ取り早く其の是非善惡を判断する爲めには、其結論だけに就て檢味すれば足るのだと申す事に相成ります。直接に結論の中味を考察すればそれで良い、又其方が要領を得たものになるのだと考へられるのであります。實際に於て我國の青年が共產黨員となるのもマルクスの史觀、哲學論に共鳴するが爲めと云ふよりも、貧者に對する同情と云ふ様な同胞愛、人道上の感じの方からするのが主であると見られるのであります。其事は其邊にして置きましてマルクスの先輩たる佛蘭西の社會學者にありては、其主張が常に人類愛、人道觀に立脚して居つたのを、マルクスは斷然之を排斥して其所謂歴史觀を以て置き代へたのであつて、之に英吉利に見る經濟問題を採り入れた事になるのであります。それが甚しく世界の社會主義者を隨喜せしめたる所以のものは、彼以前の主義者に在りては、次の社會はかうあるべきだ、あゝもあらねばならぬと、希求の問題であつたのを、マルクスは、そんなもんぢやない、欲する希望すると云ふ様な

問題では無い、所謂歴史の必然性であつて人々が好むと好まざるとに拘らず新社會は必然に且つ當然に到來するもののだと説明した點にあるとされる。如何にも斯の如き説明は主義者に大なる希望と勇氣を與うるものに相違ない。悦服されるのも當然である。御承知でもありませう、世に文明の西漸論と云ふのがある。則ち文明は西へ西へと移り行く。會つてはギリシャの文明が西行してローマに移り、更に其西佛蘭西に移つた。それが大西洋を越えて其西亞米利加に移つて、今度は大平洋を越えて其西日本に移るのだと云ふ見方でありませう。之を嬉しがつた日本人は少くないと思ひます。自分の望む所に都合の良い議論に對しては中味の不正確を頓着しないのが人情であります。マルクスが次の社會の生れるのは必然だ、當然だと云ふ説明は世界の社會主義の大多數に悦可されたのに何の不思議もないでせう。併しながら歴史の必然で當然に新社會が生れ来るものならば、御苦勞な革命なんか起さずとも、楽しんで待つてたら良かりさうなものである。革命、戰爭、何の用ありやと云ふ事になるのであります。そこはマルクスによると革命は有力なる助産婦として役立つわけなのである。革命は新社會に對する生みの親では無いが、當然に生れる新社會に對して大切な助産婦であると云ふ事になる、助産婦であれば臨月でなければ手を

下してはならない筈であるが、次の社會はもはや生れる時に到達して居るのであるかと云ふ事になると、彼はもはや充分に其時になつて居る、資本主義は已に自然崩壊期に到達してゐるんだと云ふ事で更に人々を喜ばせる。そこで彼は時は已に至れりである、資本主義は倒れかゝつてゐる、早く突き倒せ、萬國の労働者よ、結束せよ、結束して直ちに立て！ と呼びかける。萬國の労働者は随分結束して立ちもしたが、新社會は一向に生れないで幾十年を空しく重ね、萬國結束のインターナショナルの方が兎角に崩壊する。第一、第二、第二半、第三インターナショナル等數々のインターナショナルが存在するのは其爲めである。其萬國の労働者よ結束せよ、祖國を倒せ、國家は搾取の機關である、労働者に祖國は無用等々と國家を仇敵の如く叫ぶのは、猶太人流なのである。猶太人には氣の毒だけれども、祖國がない。祖國なくして諸國に流浪し、至る所の國家に迫害せられては、國家の必然性なんか目につかない。目についたつて嫌ひだ。國家を呪咀する様になるのも無理はないけれども、我々は子孫をして斯の如き不幸の運命に陥る事なからしめんが爲めに國家を擁護して、其爲め一身を犠牲とする事をも顧みないのである。是れとりも直さず生命を省みない鷄の母と心事相同じである。西洋人と我々とは少々相違があるが、西洋に於ける

萬國の労働者にしても、祖國を愛する心事がどうしても抜き切れない、其爲め國家の重大事に遭遇する毎に、インターナショナルの方が四分五裂するのが實際の事實である、現實なる實績である。又マルクスが革命を第一義として、力を一切の解決者なりとするが如き點及び力の組織化に巧妙なる點は獨逸流なのである。マルキシズムが政治上に著しく進出したのは、理論の當否よりも力の組織化に巧妙なる點に負ふ所少なからずとも見られ得る。其主張が自由平等の佛蘭西式、彼に在りては、自由よりも平等ではあるけれども、佛蘭西革命の流を汲み、經濟問題に食ひ入る所が英吉利仕込み、國家無視が猶太流、力の組織化が獨逸式、これがマルキシズムの輪郭であると存じますが、序に其求むる所の彼から云へば必然なる所の次の社會とはどんなものかと云ふ事になると、之は誰も知らないであります。マルクス自身が示しては居ないし、其弟子達も明らかにしては居ない。全然未知數である、見通しのつかない問題である。尤も次の社會はあくまでいけない、かうではならないと云ふ注文づけられてある點は多々ある。それを點綴すると、何がしかの素描の如きものが出来なくは無、併し其の出来上る素描は、矛盾自家撞着に充ちて居るのであつて實現性を持たない怪物である。總ての革命の理想なるものは、太陽と月輪を一緒に輝

かせなければ嘘だとか、柳の枝に櫻を咲かせ梅の香りをつけねばならぬと云つた様な、在り得ない事を並べるのが定石であると同様に、彼等の新社会なるものも其定石通りであると申すを憚りませぬ。何を以て之を云ふか、其筋合をと申す事になりますと、それを一々申し述べて居ては餘りに長くなりますから、又今日はマルキシズムのさうした方面を討議しやうために來て居るのでありませんし、且つは又それには内外の學者にと申しても、日本には甚だ少ない様であります。が、尠くても學者に然るべき研究者があるのでありますから、何も私共から特に御聞きになる必要もないと存じますので、私としましては今日此場所では暫く問題の外に置く事に致します。マルキシズムのあらましの輪郭を以上に止めて置きました、さて其程度に於て、自分としてはマルクスに聞き度い事があるのであります。それを申し述べる事に致します。

實はマルキシズムに間疑すべき點は多々あるのであります。繁を避くるが爲めに爰では一つだけに止めます。曰く資本主義制度の現社会崩壊が自然的に必然的に嫌應なしに到來するものであるならば、楽しんで待つてたら良い筈であるが、是非共助産婦がほしいと云ふのならば、其助産婦は革命の暴舉に代ゆるに平和なる努力を以てしてはどうかと申す事があります。もとく革命

命は生みの母では無い、然らば必須なるものでは無い筈、彼の言に従へば、助成的なものたるに過ぎないのではないか。然らばだ、我々としては同胞の血はなるべく流し度くないのである。話して判る事なら平和に判らしたら良いではないか。暴力に訴へて他を奴隷にして見ても、新社会の打開としては効果が乏しい。理性に訴へて人心を動かすに非ざれば、結果を得る事不能だとも思ふ。少くもさうした方が遙かに有効である、確實であると思へるのだが、革命は止めにする事は出来ないか、どうか、と申す事でもあります。

此點になりますとマルクスもレーニンもであります。が、「資本家が悟るもんか」と云ふのであります。「資本家が悟るもんか」こゝに彼等と我々との間には大なる見解の相違がある。彼等は力づくにあらざれば人心を動かす能はずと極め込んでしまつて居る。財物を持つ人間は殊に然りだと極め込んで居る。此極め込みは何故かとなれば、彼等は總ての人間は他人を害し、他人を犠牲として自己の利益を追求してやまぬものだ、殊に財慾のみを生命として、金輪奈落、其争奪をやめないものだ、之が奪ふべからざる人類の天性であるとし、それを大前提と致して居るのであつてそれだからこそ、階級闘争も必然である、革命も必須であると云ふ事になるわけでありませう。

一切の人間を我慾のかたまりと見て居るのであります。人間の本性がそんなに下劣なものであるとしたらば、さしむき自分などは人間を御免蒙り度くなる、死んぢやつた方が愉快だ、私共は人生は今少し意義のあるものだ、もつと／＼遙かに楽しいものだと観じて居るのであります。もしも人間の本性が其様に財利我慾のみ存するものであるとしたならば、革命を起して何になるのでせう。革命後の社會はどうなるんでせう。重ねて財利の争奪ではありますまいか、結局革命前と同じ事になるのではありますまいか、何處迄行つても餓鬼道の苦しみである。それを解脱する爲めには、是非共相互の愛がなければならぬのであるが、相互の愛さへあれば、革命なんか起さずとも社會は其まゝ美化し得る、革命は有害無益不必要と云ふ事になるじやないかと申す事に相成ります。

人間の天性は根底が種族保存の本能、其心理上の發見が相互の愛であり、善である。之に依存して現在の人類界は存在して居るのである。向上進歩の先頭たる聖賢の士は勿論其數多からずとも進化した後れたる極悪非道の悪人ととも、其數甚だ多からずである。其中間に位する大多數の人々は千差萬別であつても、大か小かの差こそあれ、相互愛の心を持たぬものは一人も無い。そ

して其何れもが修行により善化美化し得る人間のみである。これが我々の見方である。彼等の思想の根本的誤謬は人間と云ふものを見損つて居る點にある。君子は義に悟り、小人は利に悟るとか申す語があつたと思ひますが、窮せるものは亂に悟るでもありません。

元來マルキシズムは前にも一語致したる如く佛蘭西革命の所産たる自由平等の思想に流れを汲んで、極度の平等觀に偏倚し、所謂惡平等に墮したるものであつて、財産の不平等打破を始めとして一切の共有、一切の平等を觀念し、其爲め妻は夫に對する貞操の義務より解放せられざる可からず、子は親に對する孝行の擗取より解脱せざる可からず等、人倫破壊の主張をさへも生ずるに至つたものであるが、勢の赴く所人間の能力の不平等をも打破しなければならぬ事になるのであらう。進歩か退歩か此の如き不合理なる結論を演繹する事になるのも、其根本たる自由平等なるものが、天賦人權論民約說等架空の想像になるものであつて、天地の萬物、大自然を正視したる實相に基くものでは無い、自由と云ふも平等と云ふも、親愛を無視しては是れ只自己保存の本能のみに即せる思想感情であつて、獄裡の囚人に見ると同じく、是れ只萬惡の根源たりと申す外はない事になるのであります。

地球の中軸をメートル尺の基本とするにも似て一切の生物に通ずる本能を以て正邪善悪判断の標準とするときは、之を先人に試みて孔夫子の全きを仰ぎ、荀子、スペンサー、ベンザムの至らざるを見ると共に、マルクスの甚しく誤れるを知るのであります。我過てりやマルクス過てりや皆様に裁判をして頂き度いものに存じます。私の立論は眼前に見る本能以上に溯及しては居りません。若し此本能何に因て來るとならば、私は唯心でも無く唯物物でもありません、元來が兩者對立の論を當とせず、私と致しましては、矢張り孔夫子の云はるゝ通り、是れ則ち大虚の神道造化の徳と申すの外ないのであります。

附言

やがて時間が迫りますので、この程度で打切らねばならぬと存じますが、こゝで打切つては遺憾ながら尙未だ重要な部分を残した事になります、併しながらそれに致しましたが、以上により根本觀念だけは略ぼ申上げ得た事になると存じます。爾餘の部分は寧ろ適宜の御考察に御委かせ申す事に致しませう。何れ其内に小さな冊子にでも今日の御話を纏めたらばと存じて居ります

から、其節もし就て御覽を願ふ事を得ば幸であります。私は單なる一法曹に過ぎない、今は一事務官であります。哲學を論ずる資格は毛頭無いのであります。併しながら事務官として法の立案に關係致しまするにも、又は法曹として法の運用宜しきを得る爲にも、如何なる思想、如何なる運動乃至如何なる事物をも、世道人心に關する限り、見て以て速かに其要領を把握し是非善悪の識別、取捨の判断を爲す事が避くるを得ざる事となるわけであります。但しかうした立場に於ける私共としましては、社會なり人生を直視する事にはなりましたも、讀書研鑽の機會は甚だ乏しいのであります。其の状態の下に於ける自分一個の管見を、今日は圖らず皆様の前に卒直に暴露して斧正を請ふ事を敢てした事になります。考究盡さざるの點は諒として頂き度く存じますと共に、魯魚焉馬の誤には示教を吝まれざらん事切望の至りであります。

今日の御話は其初に當つて自由平等を指導精神とする佛蘭西の世相を甚だ不充分ではありましたが一つの標本として描き、其佛蘭西には遺忘せられてある所の親愛、即ち同胞相愛を指導精神とする修養園を、是亦不充分ながら他に一つの標本として描いて相互を對照し、兩者の實績に就て、善惡美醜得失の岐るゝ所以の理を、後の解説に保留して來て居るのであります。之とて

も今は改めて其解答を爰に申上ぐる迄もなく、私の云はんとする所は皆様に於ては今は已に充分御承知の事と存じます。即ち彼は自己保存性を中心とする自由平等の觀、之は種族保存性の發露たる同胞相互愛の主義、逆天と順天との相違を如實に示すのが、此兩者であると致すのであります。劈頭に忠孝の理據如何の問答が掲げてあります。之に觸るゝ事も能ふくんば一言はと存じたのでありますが、時間の關係上保留に致します。

壇を辭するに際して、重ねて一語致し度いのは、我國青年男女の赤化に就てゞあります。彼等が赤化思想に致されますのは、青春の夢高く、羽根の漸く生へた燕の子みたい、何でも出来るやつて見やうの氣分が利用せられてゐるのは勿論であります。心理の過程より申せば、マルクスの哲學理論を吟味して、之に歸依すると云ふよりも寧ろ先にも一語致したる如く、人情なり直感からだと察せられます。即ち多くの場合の實例は富者の横暴、貧者の悲惨を、かなり歪曲せしめたる程度に迄強調し、之に依つて富者に對する反感敵意及び貧者に對する同情から其心の戸を開かしめる。それだから境遇上努力奮闘を要する青年よりも、往々にして、家庭の裕かな素直な同情心のある青年が却つて傷けられる。同情心により一度心の戸を開きたる以上忽ちそこから一

切の不合理が注入せられる。之が我國民特有の自己犠牲の精神と結びついて、一身を捨てゝ願みない事となり、男子は強窃踰盜の類ともなり、女子は生命以上の性の提供をも敢てする事となるのであつて、天性の美質の故に却つて一生取り返しつかない運命に陥らせるなどは痛ましい事の極であります。彼等をして時期に早く、其不合理を自覺せしむる爲には、必ずしも總論各論と論理を正しく論ずる事を要としない。最も必要なりとする所ものは、人間の天性を直視直感せしむる事であつて、之が其捷徑たるべしとも見られるのであります。一例を申し上げます。

自分の友人に或る刑務所の長がある。一日其面前に出でたる赤化青年は、例の通り妻は夫に對する貞操の羈絆から解放されねばならぬ。子は親に對する孝行の擲取から解放せしめられなければならぬ等と意表に出でたる言論を爲せるに對し、其刑務所長は、お前の親は畜生だと放言した。青年は怒つて人の親を畜生とは何たる事ぞと難詰する。之に對し其刑務所長は、お前は今親に對する孝行の擲取から解放しなければならぬと云つて居つたが、あれはお前の口が云ふ丈けの事なので、お前の心はさうはなつて居ない、又到底孝道からお前は解放する事は出来ないのだ、現にお前は親を畜生だと云つたら怒つたではないか、お前は親を愛して居る、それが孝なんだ、

お前は到底それを解脱する事は出来ないと論じ、其青年は考へさせられ始まつたとの事でありませが、國體の問題にしても、さあらぬ場合に於ける警察官が何かの不用意な一語が、言ふ方では左程考へて云つたのではなくても、心境の相違が圖らず彼等の本性に觸れ、彼等の方では大いに考へさせられる種となつて居る事を彼等の日記中に見た事もあります。要するに御互がハツキリと人間としての根本を掴んでさへ居れば、適宜の應答で結果は得られるとも存ぜられます。彼等も人の子必ず悟る、天性は動かす可からずだと私は信じます。

繰返して申しますが、今や我國は三大國難に當面して居る。其第一が政治外交上の問題、其第二が經濟上の問題、其第三が思想問題である。而して此第三のものが一番深刻であり、又最も憂ふべきだと致されて居ります。御互の子女を危くし國運をも危くする此思想の防衛には、學國一致、國家、國民、各家庭、残らずが覺醒して立ち、共同戦線を組織せねばならぬ時であると存じます。職務や事業に關係の有無に拘らず御用意を願ひたいと存じます。丁度時間が参りましたから、御話を中断して之で失禮致します。

昭和八年三月三十日印刷納本
昭和八年四月三日發行

思想問題判断の鍵
金貳拾五錢

經濟俱樂部演講部

—(23)—

不許
複製

編輯人 神原周平
東京市日本橋區本石町三丁目二

印刷人 山下謙之助
東京市日本橋區西馬場二ノ二七一二

東京市日本橋區本石町三丁目二

發賣所

東洋經濟出版部

振替口座東京六五一八番

終

